

マスメディアに描かれる先住民の女性

森谷裕美子

I 問題の所在

2019年3月、第14回大阪アジア映画祭のコンペティション部門において、フィリピン映画「七夕の妻 (Tanabata's Wife)」が上映された。これは2018年に開催されたフィリピンの農業に関する映画祭“TOFARM Film Festival⁽¹⁾”で最優秀作品賞をはじめ最優秀女優賞、最優秀男優賞など9部門を独占受賞した作品であるが、残念ながら本作品が大阪アジア映画祭で賞をとることはなかった。

映画の内容は、大阪アジア映画祭の作品解説⁽²⁾によれば「中年の農夫、七夕は沖縄から単身フィリピンに移住し、ルソン島北部の雄大な山々に囲まれながら野菜を育てている。ある日、仕事を探しにやって来た少数民族の若い娘、ファサンを住み込みで雇うことに。共同生活の中で2人は次第に心を通わせ、夫婦の契を交わす。子宝にも恵まれ、順風満帆に見えた七夕の毎日。だが、日本人を夫にし、生活文化の違いに苦悩するファサンはある決断をする…」となっている。この解説にもあるように、実はこの映画は「夫婦愛」を描いたものののだが、その作品を見終わった日本人観客の感想には「七夕の妻は山岳に住む少数民族で、なんと首狩り族！腕の入れ墨も部族の風習らしい」とか「ボントックの女性が官能的だった」、劇場挨拶に登壇した主演女優が「ちゃんと服を着てメイクもしてキレイでびっくりました」などといった感想・コメントが寄せられていた(傍点筆者)。

これらの感想・コメントに見られるような偏見や異文化表象に関わるステレオタイプについて、リップマンは「我々は、頭のなかにあらかじめ型(ステレオタイプ)を持っていて、外界の現実をそこに流し込んで理解している」と指摘し、このステレオタイプで固められた人間の頭のなかの現実の姿を「疑似環境(pseudo environment)」と呼んだ。それは自分たちの価値基準や文化的習慣をもとに自分の頭のなかに描いてきた擬似世界で、その形成された世界観が

ステレオタイプであり、これは現実の環境の正確な反映ではなく部分的な省略や強調、誤認や歪曲などを含んでおり、我々はこのステレオタイプによって物事を判断し類型化しているのもであって、これが何事を理解する上でも先入観として存在しているという〔リップマン 1987 (1922)〕。こうしたステレオタイプのなかでも、人種や民族へのステレオタイプ形成にマスメディアが影響することはすでにこれまでの研究で明らかにされているが〔Mastro 2009〕、とりわけ映像メディアは受け手の視覚や聴覚に直接訴えるため、そこからイメージが広がって定着しやすく、これによって受け手の頭の中での作り事である「擬似環境」がさも正しいように送り手の意図しない方向へ再生産されることが多い。

本稿では、こうした異文化表象における映像メディアの問題を明らかにするため、まず、これまでの異文化表象に関する研究を整理し、そこから、上述の映画「七夕の妻」を題材に映像メディアと異文化表象の問題を掘り下げ、マスメディア研究における文化人類学の役割を再考する。なお、ここで「七夕の妻」を議論の対象として取り上げるのは、フィリピンでは先住民を取り上げる映画が多くみられること、そこには多くのステレオタイプが見られるが、「七夕の妻」の場合、その主演女優がステレオタイプで語られる「先住民」であることによる。

Ⅱ 異文化表象

リップマンによると、「それが意図的なものであるか否かに関わらず、マスメディアによって「ナマの事実」が我々のもとに「事実」として伝えられるとき、そこに何らかの変形が加えられ、画一的な既成イメージや先入観、偏見といったステレオタイプにはめ込まれて送り込まれて来ることが多い」という。そして、そうした「事実」が我々の「疑似環境」のイメージ形成に大きな影響を与えているが、受け手の大部分は、その事実を「現実環境」と照合し検証する能力も余裕もなく、これによってますます「現実環境」と「疑似環境」との乖離が大きくなるとする〔リップマン 1987 (1922)〕。

こうしたマスメディアを扱う研究は多領域に渡り、本稿で扱う映像メディアについては文化人類学の下位分野として映像人類学があるが、ここでは、映像人類学における異文化表象に関わる問題および異文化表象を考察するうえでの重要な概念としての「オリエンタリズム」について整理しておく。

1 異文化表象と文化人類学

映像人類学とは「他者の映像表象に関わる現象を文化人類学の立場から研究する学問」で、その中心は民族誌映像であるが、そこには映像を撮る側と撮られる側の「共有」の問題が存在しているという。いっぽう、この民族誌映像の「共有」の問題をより広い文脈でとらえるとき、映像人類学の全体をきちんと把握するためには「厳密な意味でのアカデミアを追うだけでは不十分であり、現代社会において最も影響力の大きいマスメディアの一つであるテレビの映像にもその焦点があてられなければならない」とする指摘がある〔箭内 2014〕。たとえば日本文化人類学会の会誌『文化人類学』（Vol. 69 No. 1, 2004）の特集「マスメディア・人類学・異文化表象」に掲載された論文では、いずれもテレビ番組での異文化表象が題材とされているが〔飯田 2004、白川 2004〕、それを貫いているのは「もはや人類学者は、好むと好まざるとに関わらず、テレビという支配的なメディアにおける他者表象と無関係ではいられないという自覚であり、人類学者はこうした状況にどのように介入していくことができるかという問題意識」であるという〔原 2004：107〕。

いっぽう 1910 年に開催された日英博覧会における「人間動物園」を取り上げた NHK のテレビ番組「アジアの“一等国”」（2009 年 4 月 5 日放映）に対する山路の論文でも異文化表象の問題が指摘されているが、この番組は、日本の台湾統治を主題にし、老人たちとのインタビューを通して 50 年間の統治政策を検証するというもので〔山路 2009：1〕、なかでも日英博覧会では日本がイギリスやフランスなどの国を真似て植民地であった台湾の先住民パイワン族の展示を行ったが、それが彼らの生活をイギリスの人々に晒すという点において非人道的であり「人間動物園」に他ならなかったという指摘が目される。山路はこの番組について、KHK の日英博覧会に関する事実認識の甘さと、その扱いの粗略さを指摘しているが〔山路 2009〕、それとは別に、阿部と古川はこの論文を通して山路が目指していることに着目しており、それは、「人間動物園」に展示されるべく「遠方からロンドンに連れて来られた」パイワン族やアイヌ民族⁽³⁾たちが当地で得た「貴重な体験」とそれがもたらした「豊かな世界」が、博覧会に関する政治・制度次元の分析や展示内容の検討だけでは捉え切れない「微細な人間模様」を介して生み出されており、こうした当事者たちが日常実践のなかで試みた「異文化理解への努力」を帝国主義的な文化的支配から脱するための「救い」として汲み取るためには、「たくましい心性」を持った多様

な当事者たちの「生きられた文化」に向けられる学問的かつ実践的な眼差しが必要不可欠」であるとする。こうした「山路独自の展覧会研究は、昨今のカルチュラル・スタディーズ的な表象研究において見失われがちで、当事者たちが自らの日常実践を通して発揮する「たくましさ」や「したたかさ」との関連で文化の創造性を検討するという課題に対して多大な示唆を与えてくれる」ものであるという〔阿部・古川 2011：77-79〕。このように、当事者たちの「生きられた文化」に目を向けることも、異文化表象を議論する際の重要な視点となるだろう。

2 サイドとオリエンタリズム

異文化をいかに表象するかという問題を議論するうえでの重要な概念にサイドの「オリエンタリズム」があるが、オリエンタリズムとは、西洋人が植民地支配の過程で作り上げた東洋（＝オリент）の表象であり、ここでは「西洋」と「東洋」という二項対立のもと、「東洋」に西洋の自己認識とは正反対の非理性的・感覚的・受動的・停滞的などといった像が付加され、これらと類似のイメージが西洋との非対称的な関係性の中で反復的に再生産されてきたという〔サイド 1993（1978）〕。すなわち、オリентは「ヨーロッパ人の頭のなかでつくり出されたものであって、古来、ロマンスやエキゾチックな生き物、纏綿たる心象や風景、珍しい体験談などの舞台」などとみなされ、そこに権力構造をはらんだ西洋のオリエンタリズムの「まなざし」が向けられてきた。いっぽうオリентは「豊饒さのみならず、性的な期待（と威嚇）、倦むことなき官能性、あくことなき欲、底知れぬ生のエネルギー」を持ち、「ヨーロッパで得られない性的体験を捜し求めることができる場所」でもあり〔サイド 1993（1978）：193、195〕、西洋人の文学や絵画に表現された「東洋」のエキゾティズムは、しばしば女性のエロティシズムを媒介として表現された〔サイド 1993（1978）：1〕。

17～18世紀のオリエンタリズムの主要な担い手はイギリスとフランスであり、19世紀後期から20世紀にはこれに代わってアメリカが主要な担い手となったが〔サイド 1993（1978）〕、スペインとアメリカに長く植民地支配されたフィリピンにも、こうしたオリエンタリズムのまなざしに向けられていたのはいくつまでもない。植民地支配にあたり、スペインはフィリピンの人々を「キリスト教徒＝文明化された人（Civilized）」と「非キリスト教徒＝未開の人（Wild）」に分類したが、スペインに代わってフィリピンを支配したアメリカもそうした

分類を強化・体系化し、「白人たるアメリカ人の文化的、人種的優越性」を示した〔Cf. 森谷 2013b〕。たとえば、この時期、植民地統治の中心的な役割を果たしたフィリピン委員会（United States Philippine Commission）⁽⁴⁾で2期にわたり委員を務めたディーン・C・ウースター（Dean C. Worcester）は、すべてのフィリピン諸島に住む人々を「部族」と呼ぶことを提唱した人物であるが〔Worcester 1906〕、彼はこうした「部族」のなかでも特に山岳地帯に住む「非キリスト教徒」の少数「部族」に強い関心を寄せていた。ウースターは1901年からこの少数「部族」に関する調査を行い多くの記録写真や映像を残しているが⁽⁵⁾、これらはアメリカの植民政策や初期の人類学の植民地主義、19世紀から20世紀初めのフィリピンの歴史や人々の生活の様子などを知るうえで最も貴重な記録の一つとされている。しかし彼の写真に関しては問題も多く、とりわけこれらの写真や映像にはフィリピン人の「後進性」と「野蛮性」が強調されているものが多々あり、また、こうした写真とアメリカ領有によって文明化された同一人物の写真を並べて対比させる写真もあって、これらの写真が、フィリピンが長期間にわたるアメリカの領有をいかに必要としているかをアメリカの人々に知らしめるために利用されていた〔Rice 2015、吉川 1996〕。ライスは、こうしたウースターの写真を構成する重要な要素の一つとして「裸」をあげているが、実際、彼の写真には多くの裸、あるいは裸に近い女性の写真があり、ライスは、これらの写真のなかからミシガン大学人類学博物館のコレクションの一つである、ボントック族⁽⁶⁾と呼ばれる「部族」の若い女性の裸の写真を取り上げ（写真1）、これを細かく観察すれば、この写真が「ウースターの抱く「いつも上半身裸でふらふらしている」という「部族」の幻想のもとに作画的に撮られたものだということがわかる」と指摘している〔Rice 2015：68-73〕。

いっぽう、彼が残したフィリピン

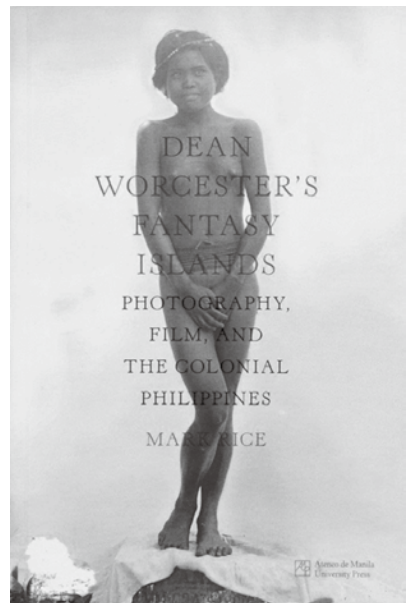


写真1 ライスが著書（2015）の表紙に用いたウースターのボントック族の少女の写真

人「部族」の男性の写真が「首狩斧を掲げる戦士」などといったイメージで描かれることが多いのに対し、女性の写真には、オリエンタリズム、すなわち「エキゾティズムを女性のエロティシズムを媒介として表現」するものが多く見られるという。たとえばウスターは同じ女性が同じ構図で「ブラウスを着ているもの」と「ブラウスを着ていないもの」を一セットとする写真を何セットも撮っており（Cf. University of Michigan Museum of Anthropology / dw05f030 と dw10L011, dw05F030 と dw05F031）、また、小川の岸に裸で横たわる一連の女性の写真は（Cf. University of Michigan Museum of Anthropology / dw10A071, dw10A082, dw10A181, dw10A087）、エデンの園を彷彿させる官能的な未開社会を人々に思い描かせるもので、なかにはゴーギャンの絵と同じようなポーズをとるものもある。これらの写真を見ても、多くのアメリカ人男性にとって、フィリピンは「豊饒さのみならず、性的な期待（と威嚇）、倦むことなき官能性、あくことなき欲、底知れぬ生のエネルギー」を持ち、アメリカでは得られない「性的体験を捜し求めることができる場所」として創造されていたことがわかる⁷⁾。

3 日本のオリエンタリズム

もちろん、オリエンタリズムとしての東洋観は西洋側だけに存在しているのではない。日本を含めアジアの国々もまた、近代化の過程の中でそのような西洋的なアジア観を受け入れてきたのであり、こうしたオリエンタリズムにおける「西洋」と「東洋」という二項対立は、「日本」と「アジア」にも適用することができる。特に日本の場合は、近代化の過程において、地理的にアジアの一員でありながら、未開の「東洋」から抜け出し先進的な「西洋」へ仲間入りすることを目指し、自らを「西洋」と「アジア」の中間に位置付け、「西洋」を見るときには「アジア」のまなざしを用いるいっぽう、「アジア」を見るときには「西洋」のまなざしを持って見つめてきた。そして、他のアジアの国々を西洋のまなざしと同一化することによってアジアを「性的な期待」、「倦むことなき官能性」、「あくことなき欲望」を挑発する場所、「日本本土ではもちえない「性的体験」を誘発」する場所として見るように至ったという〔メータセート 2010 : 6-7、姜 1998 : 96〕。

先述のフィリピン映画「七夕の妻」に対する日本人の「首狩り族」「入れ墨」「部族の風習」「官能的」「服を着てメイクもしている」などといった感想・コメントも、こうした「日本のオリエンタリズム」〔姜 1988〕の現れと解釈する

ことができるだろう。たとえば、ここで使用されている「部族」という用語は、「国家形成を指向しない、野蛮、未開、隔絶された、因習と迷信に支配された停滞的な生活」といった修飾語で飾られることが多く、一般の人々はそれをネガティブなイメージで理解している。また、「首狩り族」「入れ墨」「部族の風習」「服を着ている」などといった用語もこれと同じで、部族から連想される好戦的、裸、入れ墨、独特な言葉やしきたりの遵守などといったネガティブな共通のイメージがあり〔スチュアート 1999：427-428、2002：80-81〕、ここに日本的オリエンタリズムを見ることができる。

Ⅲ フィリピンにおける異文化表象と映像

「東洋」の人々や女性が、こうしたオリエンタリズムのまなざしによって周縁化されることはすでに述べたが、とりわけジェンダー描写は、マスメディアにおけるステレオタイピングの問題と密接な関係にあり、その内容を分析すると、①女性は家庭・男性は仕事、②女性は外見・男性は中身、③女性は受動的で優しく、男性は行動的でたくましく、などといった「伝統的」なジェンダー観がそこに反映されていることが多いという〔鈴木 1998〕。いっぽうエスニックについても、しばしばステレオタイプなオリエンタリズムのまなざしが向けられることから、ここでは、マスメディアのなかでも受け手の視覚や聴覚に直接訴え、ステレオタイプの形成に大きな影響を与える映像メディアの一つである映画を取り上げ、異文化のジェンダーやエスニックの問題がそこでどのように表象され、それを日本人がどのようなまなざしで受け止めているのかについて、近年、日本でも多く公開されるようになったフィリピンの映画を題材に検討する。

1 フィリピン映画における異文化表象

(1) フィリピン映画史

フィリピン映画の黎明期は、スペインからアメリカへと植民地宗主国が代わった変動の時代で、当時のマニラの市民はとても芝居好きで、各階層の人々がそれぞれのジャンルの演劇を楽しんでいたが、1897年に、このような演劇的土壌の豊かなフィリピンに始めて映画が紹介され、1919年には早くもフィリピン人監督ホセ・ネボムセノ（Jose Nepomuceno）による最初の映画「田舎の乙女（Ang Dalagang Bukid）」が作られた。以後、アメリカの影響のもとにマニ

ラは1930年代にアジアを代表する映画の都へと発展を遂げるが、アジア太平洋戦争の開戦で状況は一変し、1942年日本軍がマニラを占領するとフィリピン映画界も日本の国策映画に協力することを余儀なくされた。しかし戦後、直ちに復興を果たし、1950年代には高いクオリティーの娯楽映画が量産される、後に「第一黄金期」と呼ばれる時代を迎えた。1960年代になって映画産業はいったん不況に陥るが、やがてマルコス大統領の圧政下にプロテスト精神を備えた作品が続々と生みだされるようになり、70年代には「第二黄金期」を迎える。1990年になって映画界は再び低迷するが、この時期、デジタルシネマの登場により低予算で映画の製作が可能となり、若手監督が実験的でアーティスティックな作品を作れる環境が形成された。そこで若手インディペンデント作家が台頭し世界的に活躍するようになり、2005年にはインディーズ映画の祭典シネマラヤ映画祭もスタートするなど「第三黄金期」と呼ばれる新たな時代が訪れ、今日に至っている〔石坂 2019、西村 1999〕。業界全体で見れば、以前から映画の主流は首都マニラを舞台にした、マニラを含むルソン島南部を中心に話されるタガログ語の作品が多いが、デジタル化の影響で地方でも製作が活性化し、近年は地域色が見られるようになり、映画市場でも国内映画の上映が増えるなど、現在はインディペンデント映画の興隆とデジタル化の影響が顕著だという⁽⁸⁾。

(2) 先住民を扱う映画

こうして毎年多くの映画がフィリピン国内で製作されるようになったが、それらの映画には先住民や彼らの住む土地の風景がさまざまなかたちで登場している。とりわけルソン島北部を縦断するコルディリエラ山脈の周辺に住む人々（図1、注(6)参照）が映画の景観や文化的な遺産として多く用いられているが〔Campos 2016 : 378〕、それらはしばしばステレオタイプで固められたものになっていて、“Banaue : Stairway to the Sky”⁽⁹⁾（1975）や“Igorota”⁽¹⁰⁾（1968）、“Mumbaki”⁽¹¹⁾（1996）、“Ang Babae sa Ulog”⁽¹²⁾（1981）など、当事者たちとのあいだにさまざまな議論を巻き起こす映画がマニラを拠点とする映画監督によって長年にわたり作られてきた。たとえば上述の“Banaue : Stairway to the Sky”では、「男性は褌」、「女性は上半身裸」の先住民が登場し、そこでは男性が粗暴な性格で周囲の人々や女性に乱暴に振る舞うだけでなく、「厳格な一夫一婦婚であるキリスト教社会」とは異なる、女性が複数の男性を愛する社会が描かれていたという（注(9)参照）。

もちろんこうした映画のすべてが先住民やその社会の描き方に問題を含んだ大衆向けの娯楽映画であるわけではなく、歴史や社会問題を扱った作品にも先住民やその社会が題材として扱われている。たとえば、1997年の山形国際ドキュメンタリー映画祭の「アジア千波万波」⁽¹³⁾という部門で日本でも紹介された、フィリピン生まれでアメリカ在住のマーロン・フエンテス (Marlon Fuentes) が監督・脚本・撮影・編集・製作を務めた「ボントック頌歌 (Bontoc Eulogy)」(1996年)は、一部フィクションを含んだノンフィクションの作品で、「映画のナレーターを務めるイゴロット男性の祖父が、1904年のセントルイス世界博覧会 (St. Louis World's Fair) に送られ、そこに作られた村で数か月間暮らし、アメリカ人の見物物になったという事実を知った」という設定で、残された記録フィルムや生の撮影、植民地のフィリピンや博覧会のイメージと織り交ぜ、その様子をモノクロの映画で表現したものである。監督の言葉を借りれば「1904年のセントルイス世界博覧会で、「野蛮」なボントック族から文明社会に「同化」できる低地キリスト教民までフィリピンの各民族が「帝国」の構築に不可欠な事業のために標本として徴用され、「生きた素材」として陳列されていた。本映画は、それを歴史と想像力の間で、民族誌的な郷愁感に覆われた外面とそれをプレヒト的に異化する試みの間で⁽¹⁴⁾、そして幻想と反幻想の間での「揺れ」を前面に描こうとしたものであるという⁽¹⁵⁾ (傍点筆者)。まさしくこれは先に取り上げた山路の「人間動物園」であり〔山路 2009〕、紙幅の関係でここでは扱わないが、この映画についても、山路と同じように「当事者たちが自らの日常実践を通して発揮する「たくましさ」や「したたかさ」との関連で文化の創造性を検討する」ことが可能であろう。

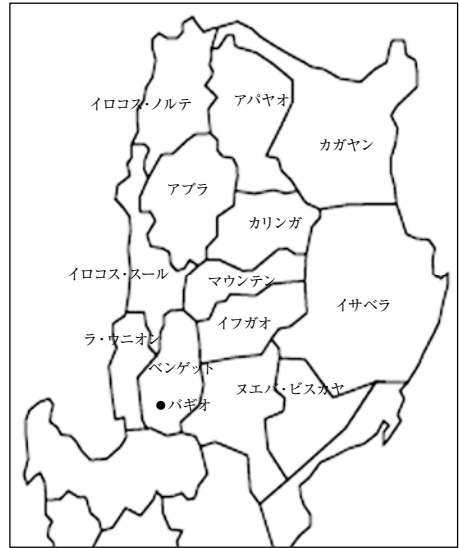


図1 北部ルソン地域 (筆者作成)

「映画のナレーターを務めるイゴロット男性の祖父が、1904年のセントルイス世界博覧会 (St. Louis World's Fair) に送られ、そこに作られた村で数か月間暮らし、アメリカ人の見物物になったという事実を知った」という設定で、残された記録フィルムや生の撮影、植民地のフィリピンや博覧会のイメージと織り交ぜ、その様子をモノクロの映画で表現したものである。監督の言葉を借りれば「1904年のセントルイス世界博覧会で、「野蛮」なボントック族から文明社会に「同化」できる低地キリスト教民までフィリピンの各民族が「帝国」の構築に不可欠な事業のために標本として徴用され、「生きた素材」として陳列されていた。本映画は、それを歴史と想像力の間で、民族誌的な郷愁感に覆われた外面とそれをプレヒト的に異化する試みの間で⁽¹⁴⁾、そして幻想と反幻想の間での「揺れ」を前面に描こうとしたものであるという⁽¹⁵⁾ (傍点筆者)。まさしくこれは先に取り上げた山路の「人間動物園」であり〔山路 2009〕、紙幅の関係でここでは扱わないが、この映画についても、山路と同じように「当事者たちが自らの日常実践を通して発揮する「たくましさ」や「したたかさ」との関連で文化の創造性を検討する」ことが可能であろう。

2 「七夕の妻」

「七夕の妻」は、1930年代にフィリピンで出版された日系人シナイ・濱田

(Sinai Hamada)⁽¹⁶⁾の短編文学小説“Tanabata's Wife”を映画化したもので、第15回大阪アジア映画祭 HP に掲載された作品解説によると、本映画は「著名作家のチャールソン・オン (Charlson Ong) が脚本化し、チョイ・パギリナン監督 (Choy Pangilinan)、リト・カサヘ監督 (Lito Casaje) とともにメガホンを取った人間ドラマ」で、「ルソン島北部の農業の発展を支えた日系人の歴史的一幕にスポットを当て、現地語と日本語を織り交ぜながら、七夕が奏でる笛の音を乗せて诗情豊かに夫婦愛を描いた。尊敬する日本映画の巨匠・小津安二郎監督、黒澤明監督の撮影手法も取り入れ、従来のインディーズ映画になかった映像美も追求」したものであるという⁽¹⁷⁾。

こうした「诗情豊かに夫婦愛を描く」という製作者の意に反して、なぜ日本ではこの映画にオリエンタリズムのまなざしが向けられたのか、次に検討する。

(1) 小説 “Tanabata's Wife”

先に述べたように、この映画のもととなったのはフィリピンで最も有名な短編小説家の一人であるシナイ・ハマダの小説“Tanabata's Wife”で、シナイによれば、これはベンゲット州の多くの日系人が農園を営んでいたトリニダッドで高原野菜を栽培する日系人とボントック族の女性との「恋愛物語」であるという。ただし、小説という形をとってはいるが、実際は、最後の部分を除きその大部分が実話にもとづいており、実際の日系人の男性タナバタはシナイの父である濱田良吉の弟の濱田善蔵で、妻のファスアン (Fas-Ang) も実在のボントック族の女性である。小説に登場する主人公のタナバタはなかなか結婚できない日系人の中年男性で「イゴロットの妻を迎えようとしたが見つからず、自分の故郷から写真花嫁を迎えようにも資金がなく困っていた。そんな時、たまたま農園労働者として雇われていた頑健で働き者のボントック族の女性を気に入って結婚生活を始める。妻は夫の仕事を手伝いながら日本の慣習を徐々に学んでいくが、必ずしもすべての異文化を受け入れることができたわけではなく、だんだんと言葉の壁や自分たちとは異なる日本人の価値観に困惑するようになる。結局、彼女はそれに耐えられなくなり、たまたま町の映画館で知り合った同郷の男性と一緒に子供を連れて生まれ故郷へ帰ってしまった。そこでタナバタは寂しさのあまり働くのをやめ酒におぼれる毎日を送るようになるが、それを知った妻は子供とともにタナバタのもとに戻り、彼はそれを喜んで受け入れた」というのが小説の大筋なのだが〔Hamada 1975〕、実際の善蔵のケースは小説と大分異なり、ボントックの女性と結婚して女の子が1人産まれたが、

妻は娘が2歳になった時に郷里のボントックに帰ってしまい、そこで再婚している。善蔵もまた妻の去った数年後には日本から妻を迎え、その妻との間に8人の子供を儲けていて、そこにタナバタとファスアンのような夫婦愛は見られない。また小説では、妻が最終的には夫のもとに子供と2人で戻ることになっているが、実際には、妻は一緒にボントックへ帰った男性に逃げられてしまい、後になって子供を夫に返している〔Hamada 1975、森谷 2016b、Villarba-Torres 1991〕。

(2) 実際の歴史的背景

この小説を書いたシナイの父である濱田良吉は戦前、鹿児島からフィリピンへ渡った出稼ぎ移民の1人である。かつてのこうした移民の渡航先は北米や中南米が中心で、19世紀末には東南アジアも登場するようになるが、東南アジアの日本人の渡航先として一番多かったのはこのフィリピンで、特に1930年代には全体の半数以上を占めていた。こうした多くの移民をフィリピンへ送り出すきっかけとなったのは、1898年にスペインに代わって新たにフィリピンを植民地支配したアメリカによるルソン島北部の高原都市バギオ（図1）の開発であり、開発が進むにつれ多くの日系移民がこのルソン島北部にやって来るようになった。これらの移民たちの最大の特徴は、その多くが現地の先住民の女性と結婚したということで、この時期、日本人とは異なる文化的背景を持つ多くの先住民が、その地に新たに築かれた日系人社会に「日本人」として包摂されることとなった〔森谷 2016a〕。この戦前の日系移民に関しては日本やフィリピンにいくつかの詳細な記録が残されているが、とりわけフィリピン在住の日系人たちの話を中心にまとめられた“Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands.”（2004）には、映画に登場するような日系人とその家族の生活の様子が細かく描かれており、そこには上述の濱田兄弟の記録もある。

本映画を見たとき、この映画のもととなった小説のモデルが実在の人物であり、残された写真や記録でその生活の様子を知っていた筆者は若干の違和感を覚えたのだが、その正体は、「事実と思われる」日系人家族の生活と、映画で表現された生活との乖離であり、特にタナバタの住む家や生活が想像以上に質素に描かれていたことや上半身裸だったボントックの女性が日系人の指示で服を着せられるシーン、彼女の入れ墨が強調されて映されることなどに違和感を覚えた。もちろんこの映画はドキュメンタリーではなく、小説をベースにしたフィクションの世界であり、監督のチョイ・パギリナンはこの映画の制作にあ

たって 1920 年代のボントックの人々の様子をどう伝えるか、さまざまな本を読んだり資料を集めたりして検討しており〔Pangilinan 2019〕、七夕の妻の役を務めたマウンテン州出身の女優もまた、親族にこの時代の女性の様子について尋ね役作りをした⁽¹⁸⁾。そういった準備を重ね、映画ではボントックの「伝統的な」生活が表現されていたのだろうが、筆者からすれば、この舞台となった 1920 年代にはすでに多くの日系人がこの土地に定着し比較的豊かな生活をおくれるようになっており、また多くのイゴロットたちが公共工事の荷役や家事労働などといった低賃金の非熟練労働者としてここで働き、やがてバギオとボントックを結ぶ道路が整備されると、今度はバギオ郊外で大規模な農業経営を行う日系人にその多くが雇用されるようになっていく時代であった。いっぽうイゴロット女性の多くは「若くて無教育ではあったが頑健で働き者であり、大胆で冒険家でもあった」ので、どこへでもよりよい生活を求めて働きに行き、進んで日系人と結婚し、そこでは、たとえ妻がイゴロットであっても子供たちには日本人の名前が付けられ、日系人家族は味噌や醤油、豆腐、海苔、梅干し、おにぎりなどといった日本の食べ物を食べ、日本酒を飲み、箸を使い、草履や下駄を履き、着物を着、畳を敷いて生活し、風呂に入り、日本の年中行事を祝っていた〔Afable ed. 2004〕。

タナバタの妻の名「ファスアン」の字義通りの意味は、ボントック語で「境界を超える (to cross over a boundary)」ないしは「反対側に飛ぶ (to jump over to the other side)」で、シナイの作品にはこの「境界を超える」というテーマが多く使われているのだが、「タナバタの妻」においても「妻ファスアンが文化の違いに困惑し、一度は夫を裏切って子供と一緒に同じボントック族の男性と郷里に逃げ帰るが、最終的には夫のもとに子供と 2 人で戻る」というハッピーエンドな物語の展開において、ファスアンは 2 つの「境界」、すなわち「伝統的」なボントックの社会から「近代的」な町での生活、そして日本の文化とイゴロットの文化という境界を超えるというテーマで物語が展開されている〔Villarba-Torres 1991、森谷 2013a〕。

3 イゴロットのステレオタイプ

もちろん、こうした映画の「事実とあわない部分」をあげつつあって、論争の輪をいたずらに広げようというのが本論文の目的ではない。ここで明らかにしたいのは、リップマンのいうように、マスメディアによって「ナマの事実」が我々のもとに「事実」として伝えられるとき、受け手の大部分は、その事実を

「現実環境」と照合し検証する能力も余裕もなく、これによつてますます「現実環境」と「擬似環境」との乖離が大きくなるのならば、本映画に登場する日系人に対する基本的な知識を持たない多くの日本人にとって、いかにこの映画が技法を凝らした素晴らしいものであったとしても、製作者の意図よりもステレオタイプによつて異文化が理解されるという事実である。人は、現実の経験がステレオタイプと矛盾するとき「自分の持っているステレオタイプを再編成するのが不都合になっているような場合、その矛盾を規則につきものの例外であるとして鼻先であしらい、証人を疑い、どこかに欠陥を見つけ、矛盾を忘れるように努める」〔リップマン 1987 (1922) : 136〕。そうだとするなら、筆者が本映画に抱く違和感も、筆者の思い描くイメージと映画で描かれるものとが矛盾することから来るものと考えられる。もっとも、映画に登場する七夕の質素な部屋で登場人物たちが卓袱台を囲むシーンは、小津安二郎監督の独特の映像世界を取り入れたもののようで、また映画を構成する風景が黒澤明監督の独特の自然の「動き」を表現するもの⁽¹⁹⁾であることに筆者は全く気付いていなかったわけで、本映画がフィクションで映画の芸術性を問うものであるのなら、筆者の違和感は全般的な外れなものだったといえなくもない。

そもそも北部ルソンに住む先住民を総称するイゴロット (*igolot*) という用語は、“*golot*” が山、“*i*” は「～の人々、～から来た人々」を意味しており、もともとは西海岸や低地に住む人々が交易をするために隣接する「山岳地帯からやって来た人々」を呼び現わすための用語であったのだが〔Guy 1958 : 58〕、やがて彼らは、植民地支配の歴史のなかで「未開人」のレッテルを貼られ、イゴロットという名称そのものも差別的な意味を持つようになっていったという〔Scott 1969 : 154-172〕。そうしたイゴロットに対する差別的なまなざしについて、フィリピンの人たちの間でもさまざまなフィリピンのメディアで描かれる「イゴロット」のステレオタイプがネット上で議論されている。それによるとイゴロットは、① 汚い、身なりがだらしない、② 禪をした戦士、③ 未開 / 野蛮、④ 貧困に喘ぐ、貧しい、⑤ エキゾチックな性的存在、などとして描かれることが多いという。こうしたステレオタイプもまた、「日本的オリエンタリズム」と同じく、同じフィリピンという国の一員でありながら低地に住むキリスト教民たちがスペインやアメリカの植民地支配から脱し「西洋」へ仲間入りすることを目指し、自らを「西洋」と「アジア」の中間に位置付け、先住民を「他者化」し、この先住民を「西洋」のまなざしで見つめるとともに彼らや彼らの住む地域を「性的な期待」、「倦むことなき官能性」、「あくことなき欲望」を挑発する

場所とみなすオリエンタリズムと考えることができるだろう。ただし、先に「東洋」のエキゾティズムはしばしば女性のエロティシズムを媒介として表現されると述べたが、フィリピンの場合、⑤のエキゾチックな性的存在というステレオタイプのまなざしは、興味深いことにイゴロットの女性だけでなく、男性にも向けられるという。女性の場合、そうした表象は、映画でいえば先の1960年代の“Igorota”に見られるが、比較的新しい1981年に制作された映画“Aug Babae sa Ulog”にも女性が同じような「エキゾチックな性的存在」として描かれている。いっぽう、イゴロットの男性に対するこうした「エキゾチックな性的存在」という表象は比較的最近のもので、肉体美を強調したダンスを見せる男性ダンサー（macho dancer）が自分たちをエキゾチックな存在に見せるためにイゴロット男性の褌を身に着けることがあるという⁽²⁰⁾。これらのことから、「七夕の妻」に「首狩り族」「入れ墨」「部族の風習」「官能的」「服を着てメイクもしている」などといったステレオタイプのまなざしが日本人から向けられるように、フィリピン人もまたメディアの世界において、先住民にオリエンタリズムのまなざしを向けていることが分かる。

4 “Tanabata’s Wife”と「七夕の妻」に見られるジェンダー

戦前の北部ルソンには、夫婦ともに日系人の家族たちと、日系人男性を家父長とし日本人と文化的に似通った「男性よりも劣位におかれること」を良しとするイゴロットの女性〔Villarba-Torres 1991〕を妻とする家族たちによって日系人コミュニティが形成されていた。ここでの生活は家族全員の協力が不可欠であったので、妻は「働き者で健康」でなければならなかったが、そもそもイゴロットは丈夫で働き者であったので「日本人の妻」としては申し分ない存在であったという。筆者は以前、この“Tanabata’s Wife”をめぐるジェンダー表象について議論したことがあるが、そこでは、「社会を映す鏡」としての文学にもステレオタイプ化されたイメージとアイデンティティが現れることから、この小説での「日本人妻」としてのイメージや日系人の家族関係を規定するジェンダー表現を整理し、そこから戦前、北部ルソンに形成された日系人社会では、他者であるイゴロットの女性を包摂しそこにジェンダーによる秩序を設定することによって、北部ルソンという他者の地に「想像の共同体」である日系人社会を構築し、こうした想像の共同体が、皆が自己の帰属するものとイメージする共同幻想を成り立たせる小道具として「家父長家族における妻や家族のあるべき姿」というイメージを共有した、という事実を明らかにした〔森谷

2016b]。

いっぽう映画「七夕の妻」では、そうしたジェンダーが前面に強調して描かれていないことから、こうした映画の歴史的背景についての知識を持たない観客によって小説とは異なる「オリエンタリズム」という固定化されたまなざしが向けられたことがわかる。

もちろん本映画の舞台は1920年代で、当時はまだ上半身裸で入れ墨を入れた女性や禪姿の男性も多くおり、首狩りも依然として行われていたのであって、そういった意味では本映画の異文化表象は必ずしも間違っているとはいえないだろう。しかし、1970年代ごろまで見られたボントッ

ク族の文化を取り上げ、それを現在のボントックの男女が回想するという、2014年に制作されたフィリピン人によるドキュメンタリー映画“Walang Rape sa Bontok (Bontok, Rapeless)”の宣伝ポスターに、先術のウースターの指示で撮られたチャールズ・マーティンの写真(写真2)が用いられているという事実は、その背景となる時代や「現実」に関わらず、「後進性と野蛮性」といったイゴロット女性のステレオタイプによって、しばしば先住民が登場する映画の内容のイメージが示されていることがわかる。

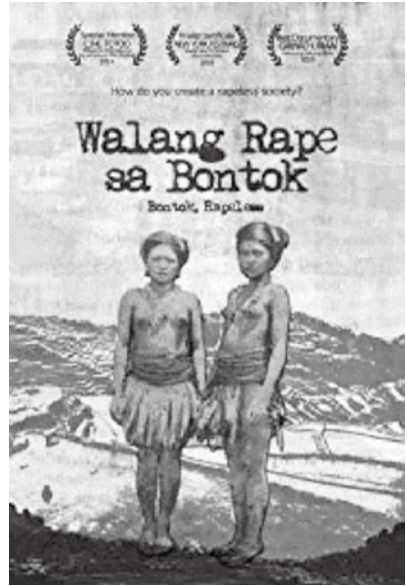


写真2 “Walang Rape sa Bontok”の宣伝ポスター (IMDbの映画紹介ページより転載)

おわりに

1980年代以降、人類学者の書く民族誌の異文化表象が批判的に検討されるようになったが、飯田は、人類学者による民族誌を超え、他分野における異文化表象に対して人類学がいかなる役割を果たせるのか、あるいは果たすべきなのかを、現代日本のドキュメンタリー番組を通して考察している〔飯田 2001〕。それは異文化を扱うドキュメンタリー映画、さらにはドキュメンタリーでない映画についても同様であり、実際のところ、近年、アジア映画に対する関心が

高まり、アジア映画に関する書物の出版も活況を呈していると宣伝されているが、こうしたアジア映画に関する興味は作品の背後にある多層的な歴史や社会には向けられず、ともすれば植民地主義に根差したエキゾティシズム（異国情緒）と結び付けられがちであるという〔西村 1999：29〕。近代の日本が、自分を西洋とアジアの中間に位置づけ、西洋を見るときにはアジアからのまなざしを、アジアを見るときには西洋からのまなざしを持って見るということはすでに述べたが、これをジェンダーの問題からとらえなおせば、「同じ女だからと言って、それぞれが立っている地平は決して地続きなのではなく」「ジェンダーとは、性別やセクシュアリティの問題を超えて、階級差やレイシズム、ナショナリズムの問題」であるとする視点も〔鄭 2003：289、63〕、異文化表象において重要となるだろう。

リップマンは、人が容易に自分のステレオタイプを変えられないことを承知しながらも、すべての人が自己の「ステレタイプに固執するわけではなく、好奇心が強く開かれた心の人であれば、その新しい経験はすでに頭にあるイメージの中にとりこまれ、それを修正することが許されるとした〔リップマン 1987（1922）：136〕。日本のテレビ番組におけるメラネシア表象を検討した白川は、民族誌的著作物が製作者側の情報源やアイデアの供給源として使用されることにより、対象の選択の仕方や描き方をめぐる参照関係のネットワークの中に取り込まれていることを明らかにしたが〔白川 2004〕、「七夕の妻」でもその制作にあたって事前にさまざまな研究者の文献を用いて調査が行われており、また、先に述べた“Walang Rape sa Bontok”ではボントック研究の第一人者である文化人類学者の文献をもとにドキュメンタリーが展開されている。それゆえ、一般向けの映画の製作においてもひとつひとつ、白川がいうように「人類学者が異文化表象の問題と向き合うとき、その非を一歩的に断罪してことを済ませるだけでは不十分であり、人類学者の表象の在り方を問い直す、あるいはそれが人類学者以外の人にとどのように受容されているかを明らかにする」必要があるだろう〔白川 2004：132〕。

『文化人類学』でこうした問題の特集が組まれた2004年からすでに15年以上の年月が経ったが、未だマスメディアの異文化表象にこうしたオリエンタリズムのまなざしが見られる、ないしは向けられている現状を顧み、今一度、人類学者が異文化表象の難しさを再確認し、質の高い情報を発信し続けるのなら、「好奇心が強く開かれた心の人」が、その情報をすでに頭にあるイメージの中に取り込み、ステレオタイプを修正することが可能となるに違いない。

最後に、山路の研究に示された「帝国主義的な文化的支配から脱するための「救い」としての「たくましい心性」を持った多様な当事者たちの「生きられた文化」に対する学問的かつ実践的な眼差し」について〔山路 2009〕、フィリピンのメディアにおけるそうした当事者の「したたかさ」「たくましさ」をここで紹介しておきたい。最初に「七夕の妻」で妻の役を演じた女優は先住民であると述べたが、彼女は役者としてこの「七夕の妻」で注目され、2019年にはフィリピンを代表する映画賞のひとつ“Gawad Urian Awards”で主演女優賞の候補に選ばれるなど、フィリピンで活躍している⁽²²⁾。その彼女は、マスコミから差別的な意味合いを持つ「イゴロット」の女優という肩書とともに言及されることが多いのだが、彼女はそれを隠すことなく、ボントック族の民族衣装を「自身を表象するモチーフ」として身に付け、さまざまなシーンに登場している。両親はマウンテン州の出身ではあるが、彼女自身は北部ルソンの中心的な都市であるバギオ（図1）生まれの都会育ちで、バギオの大学を卒業しており、映画に登場するようなボントック女性の「伝統的な」生活を経験しているわけではないのだが⁽²³⁾、イゴロットのルーツを持つことを武器に「したたかに」「たくましく」活躍の場を広げ、その夢をかなえている。

注

- (1) 農民組織である「農業の自由の財団（The Freedom to Farm Foundation）」の代表者が発案した映画祭で、農民の専門的な能力の開発と社会的な地位の向上を目的に開催されている（TOFARM Film Festival Philippines HP： <https://www.facebook.com/tofarmfilmfest/>、2019年12月10日アクセス）。
- (2) 第15回大阪アジア映画祭 HP（<http://www.oaff.jp/2019/ja/program/c13.html>、2019年12月10日アクセス）
- (3) 実際は、博覧会にはパイワン族だけでなくアイヌ民族も「展示」されており、「日本人」自身も職人・芸人としてロンドンの人々の好奇のまなざしのもとに「展示」されていた〔山路 2009〕。
- (4) アメリカによる植民地統治期のフィリピンは、植民地支配をスペインから継承したアメリカに抵抗するフィリピンとアメリカとの間で戦争が行われた軍政期（1899年～1901年7月）と、それ以降の民政期に大きく分けることができるが、両期を通じてアメリカのフィリピン統治の中心に置かれたのがこのフィリピン委員会であった。このうち軍政期の1899年に派遣された第1次フィリピン委員会はフィリピンの調査を主たる目的とし、1900年から始まった第2次フィリピン委員会では本格的な民政下の政策立案・実施と立法活動が行われた〔吉川 1996：24-25〕。
- (5) ウースターは自ら、あるいは彼の指揮のもとフィリピン中の風景やそこで暮らす人々の様子に関する写真を数多く残している。そのうちミシガン大学人類学博物館（University of Michigan, Museum of Anthropology）には約4500枚の写真乾板と263のナイトレートフィルム、約300枚のスライドのコレクションがある（ミシガン大学人類学博物館 HP、<https://lsa.umich.edu/ummaa/exhibits/worcester-photograph-collection.html>、2020年1月7日アクセス）。

- (6) 北部ルソンを縦断するコルディリエラ山脈 (Cordillera Central) の裾野に住む先住民で、主としてマウンテン州に居住しているが、彼らは、しばしば周辺に住むイスネグ族 (アバヤオ州)、カリंगा族 (カリंगा州)、イフガオ族 (イフガオ州)、カンカナイ族 (ベンゲット州およびマウンテン州)、イバロイ / ナバロイ族 (ベンゲット州)、ティンギャン族 (アブラ州) などとともにイゴロット (*igolot*) と総称される (図1)。
- (7) Visualizing Cultures (https://visualizingcultures.mit.edu/photography_and_power_02/dw02_essay01.html, 2020 年 1 月 7 日アクセス)
- (8) 映画.com (<https://eiga.com/news/20151027/1/>, 2019 年 12 月 20 日アクセス)
- (9) 内容: Banawe という名の女性が、同じ「部族」の仲間たちと新たな居住地を求めて北部の山岳地帯にやって来たが、その土地を巡って他の「部族」と争いになり、その戦闘で彼女の「部族」の男性のほとんどが亡くなってしまった。彼女は戦いで傷ついた恋人を残し、仇を討つために敵のもとに向かったが、そこで勇猛な敵のリーダーに恋をしてまい、そこで大きな決断を迫られる (iTunes Preview: <https://itunes.apple.com/us/movie/banaue-stairway-to-the-sky/id1441748905>, Sun Star Baguio: <https://www.sunstar.com.ph/article/1763685>, 2020 年 1 月 7 日アクセス)。なお Banawe というのはルソン島北部のイフガオ州の郡の名前でもあり、世界文化遺産のコルディリエラの棚田群のある地として広く知られる。
- (10) 内容: イゴロットの女性 (*igorota*) がマニラ出身の男性に恋をして家族の反対を押し切って結婚したが、いつも義理の家族から山での生活や着ている物のことでばかにされ、それに耐えられなくなった彼女は夫と 2 人で自分の生まれ育った土地に移り住むことを決める。しかし、そこで彼女の親族に夫が斧で殺されることになる (IMDb: Internet Movie Database, https://www.imdb.com/title/tt0225968/plotsummary?ref_=tt_ov_pl, 2020 年 1 月 8 日アクセス)。
- (11) 内容: 若き医師が、「部族戦争」で殺されたイフガオ族の指導者の父親の埋葬に立ち会うため生まれ故郷のマウンテン州に戻るが、そこで彼はイフガオ族の豊かな文化を知り、イフガオ族としてのプライドを持つようになる。彼はアメリカでのキャリアに未練を残しながらも、現代医学を拒否する、疫病が流行り紛争の只中にある村を支援したいと強く願うようになる (IMDb: https://www.imdb.com/title/tt0318466/plotsummary?ref_=tt_ov_pl#synopsis, 2020 年 1 月 8 日アクセス)。なお *mumbaki* はイフガオ族のシャーマンである。
- (12) *ulog* はボントック族の若い娘たちが寝泊まりをするための宿で、そこで男性は年長の女性の管理の下に娘たちを訪ね求婚する。初期の人類学的研究が、この *ulog* が若い男女が自由に性的な関係を持つことができる場所とする誤った理解を作り出し、この映画がこうした理解の下に作られセンセーショナルを巻き起こしたという (Inquirer.Net: <https://opinion.inquirer.net/116508/misinterpretation>, 2020 年 1 月 8 日アクセス)。具体的な映画の内容については不明。
- (13) 1989 年に始まった山形国際ドキュメンタリー映画祭は、ドキュメンタリー映画に特化したアジアでも数少ない映画祭の一つである。この映画祭には、最新のドキュメンタリー映画を上映するインターナショナル・コンペティションだけでなく、アジアのフレッシュな才能を紹介するもう一つのコンペティション部門「アジア千波万波」がある (山形国際ドキュメンタリー映画祭 HP: <https://www.yidff.jp/about/about.html>, 2020 年 1 月 7 日アクセス)。
- (14) 残念ながら筆者は、この「プレヒトの異化の試み」について議論する知識を持たない。
- (15) 山形国際ドキュメンタリー映画祭 HP (<https://www.yidff.jp/97/cat051/97c089.html>, 2020 年 1 月 7 日アクセス)
- (16) ベンゲット州のバギオ (図1) で生まれた日系 2 世で、フィリピンの著名な詩人、エッセイスト、短編小説家でもある。父の濱田良吉は 1904 年に鹿児島からフィリピンへ渡り製材所で働いていたが、1907 年頃にイバロイ族 (注(6)参照) で最も有力な一族の長女と結婚した。彼は日常的に母の親族と接することが多く、日系人よりもイバロイ族の一員であるという意識の

方が強かったが、「日本人であること」を捨てたわけではなく、戦後の激しい反日感情のなかでも「ハマダ」の姓を変えたりフィリピンを離れたりしようとはせず、日系人とイグロットして受け継いだ双方の遺産を等しく誇りに思っていたという〔Hamada 1975, Agwaking 2011〕。

- (17) 注(2)に同じ。
- (18) Sun Star Baguio (<https://www.sunstar.com.ph/article/1775630>, 2020 年 1 月 7 日アクセス)
- (19) SINDIE (<https://www.sindie.sg/2019/03/review-tanabatas-wife-2018.html>, 2020 年 1 月 10 日アクセス)
- (20) From the Boondocks (<http://igorotblogger.com/2007/03/you-according-to-stereotypes-ii.html>, 2020 年 1 月 10 日アクセス)
- (21) IMDb (<https://www.imdb.com/title/tt4024848/>, 2020 年 1 月 10 日アクセス)
- (22) Sun Star Baguio (<https://www.sunstar.com.ph/article/1804945>, 2020 年 1 月 10 日アクセス)
- (23) IMDb (https://www.imdb.com/name/nm8752387/bio?ref_=nm_ov_bio_sm, 2020 年 1 月 10 日アクセス)

参考文献

阿部潔・古川彰

2011 「社会表象研究の地平—「生きられた文化」への眼差し—」『社会学部紀要』111 : 71-84。

Afable, P. O. ed.

2004 *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands*. Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon Inc., Baguio City.

Agwaking, H. P.

2011 *Literary Criticism on Hamada's Tanabata's Wife*. (<http://ja.scribd.com/doc/83620911/literary-criticism-on-Hamada-s-Tanabata-s-Wife#scribd>, 2020 年 1 月 9 日アクセス)。

Campos P. F.

2016 *The End of National Cinema: Filipino Film at the Turn of the Century*. UP Press, Quezon City.

Guy G. S.

1958 The Economic Life of the Mountain Tribes of Northern Luzon, Philippines. *Journal of East Asiatic Studies*, 7-1: 1-88.

Hamada, S.

1975 Tanabata's Wife. *Collected Short Stories*. Baguio Printing & Publishing Co., Inc., Baguio City.

原知章

2004 「メディア人類学の射程」『文化人類学』69-1 : 93-114。

飯田卓

2001 「イメージの中の漁民—ある海外ドキュメンタリー番組の分析」『民博通信』92 : 81-95。

2004 「異文化のパッケージ化—テレビ番組と民族誌の比較をととして」『文化人類学』69-1 : 138-158。

石坂健治

2019 「フィリピン映画史」石坂健治・夏目深雪編『躍動する東南アジア映画』論創社。

鄭暎恵

2003 『〈民が代〉 斉唱—アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店。

姜尚中

1988 「『日本のオリエンタリズム』の現在—「国際化」に潜む歪み」『世界』522 : 133-139。

- 1998 『オリエンタリズムの彼方へ』 岩波書店。
- リップマン W.
1987 『世論』(上)(下)、掛川トミ子訳、岩波書店 (Lippmann W. *Public Opinion*. 1922)。
- Mastro, D.
2009 Effects of Racial and Ethnic Stereotyping. In J. Bryant, & M. B. Oliver (Eds.), *Media Effects: Advances in Theory and Research*. Third edition, Routledge, UK,
- メータセート・ナムティップ
2010 「日本文学にみるタイ表象」『立命館言語文化研究』21-3 : 5-16。
- 森谷裕美子
2013a 「フィリピン北部ルソンにおける日系人と「イゴロット」の関係性」『九州産業大学国際文化学部紀要』55 : 95-112。
2013b 「フィリピン植民地支配下の人類学的研究」『南島史学』79・80 : 144-159。
2016a 「フィリピン日系人社会における異民族間結婚の促進要因」『九州産業大学国際文化学部紀要』65 : 83-104。
2016b 「フィリピン日系人社会におけるジェンダー表象」『明治大学政経論叢』84-3・4 : 151-179。
- 西村安弘
1999 「ヘラルド・デ・レオンとその周辺／横断的フィリピン映画史試論」『東京工芸大学芸術学部紀要』5 : 29-37。
- Pangilinan C. S.
2019 *Tanabata's Wife: From Text to Screen*. U.P. Institute of Creative Writing, Quezon City.
- Rice M.
2015 *Dean Worcester's Fantasy Islands*. Ateneo De Manila University Press, Manila.
- サイード E. W.
1993 『オリエンタリズム』今沢紀子訳、初版第8刷、平凡社 (Said, Edward W. *Orientalism*. 1978)。
- Scott, W. H.
1969 *On the Cordillera*. MCS Enterprises, Manila.
- 白川千尋
2004 「日本のテレビ番組におけるメラネシア表象」『文化人類学』69-1 : 115-137。
- スチュアートヘンリ
1999 「民族とその周辺」『民族学研究』63-4 : 420-429。
2002 『民族幻想論—あいまいな民族 つくられた人種』解放出版社。
- 鈴木みどり
1998 「ジェンダーとメディア」竹内郁郎・児島和人・橋本良明編著『メディア・コミュニケーション論』北樹出版。
- Villarba-Torres, A. K
1991 Fas-Ang: Cross-Cultural Currents in the Literature of Sinai Hamada. *Philippine Studies* 39 : 135-157.
- Worcester, D. C.
1906 The Non-Christian tribes of Northern Luzon. *The Philippine Journal of Science* 1-8 : 84.
- 山路勝彦
2009 「日英博覧会と「人間動物園」」『関西学院大学社会学部紀要』108 : 1-27。

箭内匡

- 2014 「序章 人類学から映像—人類学へ」村尾静二・久保正敏・箭内匡編『映像人類学—人類学の新たな実践へ』せりか書房。

吉川洋子

- 1996 「米領フィリピン期のアメリカ人によるフィリピン地域研究」『総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて』重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ 14：15-54 (<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/187541>、2020 年 1 月 6 日アクセス)。